

「全国に誇れる酪農家をめざして」

栃木県立那須拓陽高等学校
農業経営科 3年 高塩 純

「自分も牛になるんだ。」、そう思って手綱を引く。人が牛をリードし、牛とともに歩き、牛の体型や歩行、気質を競う品評会。それが共進会です。私が初めて家の牛を引かせてもらったのは忘れもしない中学1年の時でした。結果は8頭中6位。無惨な結果に終わりました。牛が思うように歩いてくれず、途中で止まったりそして暴れたり、自分のリードの未熟さを痛感し、恥ずかしさと悔しさから早く終わってほしいと感じずにはいられませんでした。

私の家は、栃木県北部の那須塩原市で酪農を経営する専業農家です。現在、作乳牛34頭、育成牛22頭を飼育し、1日の平均乳量は1000kg、年間の粗収入は約3,300万円です。祖父がクワ1本で原野を切り開き、乳牛1頭からのスタートでした。当時は現在のような用水路はまったくなく、イネをつくりたくても水がない状態で、コップ1杯の水にも苦労したそうです。麦や粟、稗の現金収入ではたかが知れており、何とか現金収入を増やしたいと、酪農経営を始めました。その後、父が頭数を増やし現在の規模にまで拡大してきました。仕事を一緒に手伝いながら、祖父や父のこの話を聞いたたびに、「自分もこの那須の大地で牛を飼いたい!」、と思わずにはいられません。

中学1年の共進会をきっかけに、私は父や近所の酪農家にリードのしかたを学ぶため、土、日曜日は必ず牛舎に通いました。「気持ちに通じ合えばきっと歩いてくれる。」そう思い、できるだけ牛と触れ合うようにしました。牛とともに少しずつ呼吸を合わせ歩けるようになるのに3年かかりました。そして那須拓陽高校に入学した年の4月、県の共進会に私はわが家の牛「レッドマン」とともに出場しました。「無理な力を入れず、自分も牛だと思って歩くんだ。」、そう自分に言い聞かせながら順番を待ちました。緊張の長い時間。これまでレッドマンと毎日一緒に体を洗い、毛刈りを行い、寝食もともにした私は次第に気が落ち着いてきました。レッドマンは前日からエサを食い込んでいたので、体がしっかりとできていて、コンディションは好調でした。そしていよいよ出番です。レッドマンは調教の時のようにしっかりと歩き、優雅な姿を見せてくれました。結果はなんと1位になることができました。あの時のうれしさと興奮は今でも忘れることはできません。しかも、この共進会は関東地区の予選を兼ねていたため、関東大会の出場権を得ることもでき、二重の喜びとなりました。

しかし、この喜びもしっかりした経営基盤があつてのことなのです。「父の後を継いだとき、果たして自分に何ができるのだろう。」私は今、高校3年生になり、将来の経営を真剣に考えるようになりました。「祖父や父が築いてきたわが家の酪農経営を自分はさらに大きくしたい。」、そう考えると期待と不安が胸をよぎります。そこで、さらに経営を発展させるためにはどう

したらよいかを考え、現在のわが家の問題点を洗い出してみました。まず第1に飼料代の問題ができました。最近の飼料代の高騰はわが家の経営にも大きく影響しています。現在、わが家の年間の総支出額は1,440万円で、そのうち飼料代は1,150万円であり、支出の何と80%も占めているのです。乳価は今年の4月より1リットルあたり10円上がりましたが、それ以上に飼料が値上がりしているため、収入は逆にひと月約20万円の減少となってしまっているのです。父は「このままじゃわが家も廃業かな。」、と時々さびしそうに話することがあります。私は「代々続けてきた牛飼いをここでやめたくない!」、と言うと、父は「そうだな、お前がやる気があるならまだまだ努力はできるよ。」、と力強く言ってくれます。私はこの対策として、牧草などの自給飼料の生産を増やすことを考えています。私が後継者として就農した場合、年間の労働時間は約2,500時間ほど増えることになり、この労働力を自給飼料の生産に回せば約4haの牧草地を増やすことができます。デントコーンを栽培することで、約19tをわが家でまかなうことができます。金額的には60万円の節約になると見積もっています。牧草地は借地で増やすことを考えています。現在わが家の周囲には酪農をやめた人の農地が余っており、その人たちは農地の対応に困っているのが現状です。これらを借りることにより面積を増やすことができます。慣れればさらに借地も増やせると思っています。コスト削減の対策として有効な方法であると私は考えています。コスト削減についてはまだまだ工夫の余地があると思われるので、さらに詳しく経営を調べていきたいと思っています。

第2の問題点は給与設計です。牛1頭ずつの細かな給与設計がまだわが家では不十分であるということです。1頭1頭の体調管理をきめ細かくチェックし、与える飼料の種類や量を変えていく必要があります。毎日牛を見ていて、私は日によってエサの食べ残しがあることに気付いたのです。わが家は成牛と育成牛に与えるエサの種類や量は変えていますが、1頭1頭までは変えておらず平均的に与えています。それによって食べ残しも出てくるのです。この食べ残しがなくなるように、毎日の観察によって給餌量を1頭ずつ変えることによりムダを省くこともできます。また、きめ細かな給餌設計は牛の健康管理にもつながります。このために私は牛群検定を徹底して行いたいと考えています。牛群検定を受けることにより1頭あたりの年間乳量やエサの要求量のデータが得られ、これをもとに飼料設計ができるからです。月に1回は必ず受けたいと考えています。

この他、私は和牛子牛の生産・販売も経営に導入したいと考えています。これは和牛の受精卵移植による方法で、現在、学校で受精卵移植について学んでいるところです。

私の最終的な夢。それは、わが家で作ったエサでしっかりとした牛を作り、全日本ホルスタイン共進会に出品することです。将来、広い視野で酪農を見ることができるよう、現在、農業クラブの会長として牛乳消費に関する出前授業を小学校で行ったり、地域の酪農フェアや幼稚園児の農場見学の対応に積極的に参加しています。また、2年生の時には北海道

農業実習に参加し、2週間の酪農家でのホームステイを体験してきました。栃木県と北海道の酪農のちがいを学ぶよい機会となりました。また、このホームステイを通し、お互いの情報交換を出来合えるよい友人も得ることができ、実りの多い実習とすることができました。今でも定期的に連絡を取り合っています。

県の共進会で審査員の方々からいただいた、「体高・体長に優れ、各部のバランスも良く、肋も良く開帳し、開脚においても歩様がスムーズで安定している。」というレッドマンへの講評。わが家で初めていただいた未經産の部の名誉賞でもありました。私はいつまでもこの感激が胸に残っています。

「共進会で再びあの喜びと興奮を味わいたい!」。その望みをかなえるため、私は残りの高校生活をさらに酪農の勉強についやしたいと考えています。

私の酪農への夢はますます大きくなるばかりです。
